Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-04-29

Covid-19 の脅威下における災害ボランティア活動を通じた大学生の社会的共同性の自覚化

清野，未恵子

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,15(2):121-129

(Issue Date)
2022-03-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81013207

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013207

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要
第15巻第2号　2022

研究論文

Covid-19の脅威下における災害ボランティア活動を通じた大学生の社会的共同性の自覚化

Appearance of social communality of university students through disaster volunteering under the Covid-19 disaster

清野　未恵子*
Mieko KIYONO*

要約：災害の多い日本において、遠方から駆けつける災害ボランティアは復旧から復興までを支える力となりつつあった。また災害ボランティアは地域福祉への広がりのみならず社会を変革する動きとしても期待されている。そのような時代の中でCovid-19の蔓延（コロナ禍）により多くのボランティア活動が中断した。そこで本稿では令和2年豪雨災害で被災した熊本県八代市坂本町における、発災早期から被災1年後までの現地訪問を通した支援活動を通してコロナ禍のボランティアの可能性を問うことを目的とした。その結果、コロナ禍の災害ボランティア活動としては対面型と非対面型の活動が展開でき、特に非対面型の活動は、公共空間に災害ゴミがあり続けることで被災という精神的なダメージを受け続けている住民に寄り添うような間接的なものであった。この活動は、援助しながら援助される、あるいは、眼前にいない他者の存在を空間の中で認識しそこに働きかける想像・創造力を必要とするもので、深いレベルの社会的共同性の自覚化を促す方法として有効なのではないかという仮説を得た。また、コロナ禍といった混乱した社会におけるボランタリズムの発露や、そのボランティアの境界の設定をめぐる葛藤が、従来の災害ボランティアを超えて社会変革につながる一歩として重要な意味をもつと考えられた。

キーワード：災害ボランティア、大学生、社会的共同性、Covid-19、コロナ禍、豪雨災害

1．はじめに

日本国内のみならず世界的にも自然災害の頻度が増加している。そうした災害が発生するたびに現場へ駆けつけるボランティアの存在がニュースで報じられてきた。そうした人々は「災害ボランティア（鈴木ら、2003）」と呼ばれ、集まった災害ボランティアらが効率的に支援に向かえるよう、災害ボランティアセンター（VC）の組織化や災害ボランティア組織のネットワーク化が進められてきた。一方、本間（2014）は、災害ボランティア活動を被災地へ足を向けさせる人寄せの場にするのではなく、ボランティア活動の関心を「被災／被害」から「地域や人」に向けることが必要であると指摘している。また、一過性の人集め的ボランティア活動は、長い目で見ると被災地の経済復興に寄与するものではないため、災害VCは被災直後の緊急援助から復旧復興支援、そして地域福祉へつながる支援を目指す必要性があると指摘した。しかしながら、組織化が進んだ災害ボランティアは、災害直後の混乱から急激な秩序回帰へとドライブする現象として捉えられ、災害ボランティアが被災地の外部を超えて社会を変革するほどの広がりを見せていない（大門ら、2020）との指摘もある。このように、災害ボランティアの地域福祉への広がりや社会変革の可能性が問われている今日、既存の災害ボランティアの枠を超えた実践を生み出す方法論や理論的展開が求められている。

そのような中、2020年3月に端を発したCovid-19の蔓延（コロナ禍）は、対面での活動を基本とするボランティア活動を中断に追い込んだ。災害ボランティアネットワークの一つであるJVOARDは、コロナ禍の災害を想定し、コロナ禍の災害ボランティアに関するガイドラインを発行した（新型コロナウィルスの感染が懸念される状況におけるボランティア・NPO等の災害対応ガイドラ

＊神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

（2021年10月7日　受付
2022年1月24日　受理）

イン、JVOARD、2020年6月)。ここでは、「全国から・迅速に・短期集中」で現地に駆けつけるといった支援のあり方を見直す必要に迫られていること、多くのマンパワーを必要とした活動等において慎重に対応すべき要素が多く、これまでの支援の常識が当てはまらなくなっていることが示されていた。その直後に、令和2年7月豪雨災害が発生し、災害ボランティアとして現地に行くか否か、また、災害ボランティアを受け入れるか否かをめぐり人々が混迷するという事態が発生した。上述のガイドラインはその混乱を十分に想定できていたものとはいえず、次々に新たなガイドラインが策定された。渥美(2021)は、この事態をうけ、災害ボランティアを秩序化しようとする勢力によって一斉に現地に赴くことを抑制する「不当な権力作用」が発動されたと指摘した。

今回の不当な権力作用は、実際に県外から被災地へ向かう災害ボランティアの動きを止めた。また、この災害を契機に設立された熊本県内の災害VCは県外からの災害ボランティアを受け入れなかった。これは、ボランティア・行政双方が接近しすぎると、規模としてはるかに大きい行政のフォーマル組織の論理が勝ちすぎ、ボランティアの下請け化や排斥、衝突が起こりかねない(立木、1997)とされている現象が現実のものとなったといえるだろう。立木(1997)は、行政サービスとの関係からみたボランティア活動は、付加サービス業務と補完サービスに分けられ、付加サービスはインフォーマル的色彩(日常知識・常識の活用、非標準的課題、小規模)が強く、補完サービスは、フォーマル組織の時間・労力・人員不足のために実施されない、本来は専門職によって提供されるべきものであるとした。被災地においてフォーマル・ノンフォーマルのリンケージが必要であると考えられる中で、従来の災害ボランティアが補完サービスに終始し、かつコロナ禍では遠方からのボランティアさえも排除するのであれば、社会変革どころか地域福祉の可能性も開くことができないであろう。そこで、改めてインフォーマルなボランティア活動に社会の変革の可能性を見出すことができるのではないかと考えたのが本研究の立脚点である。インフォーマルなボランティア活動は、「ボランティアが担うことが望ましい領域(岡本、1997)」を常に問うことであり、それは社会的共同(後述)とは何かを問うことにつながる。ボランティア自身がその問いに悩みつつ活動するプロセスが、社会的共同性や公共性の自覚を促すならば、そうした社会的共同性を自覚化する災害ボランティアに社会変革の主体としての可能性を見出しうるのではないだろうか。

そこで本稿では、コロナ禍に著者らが主となって組織化した被災地でのインフォーマルな災害支援活動に着目し、コロナ禍の災害ボランティアの地域福祉への広がりや社会変革の可能性を、社会的共同性の概念を用いて検討した。また、その検証の方法として、支援活動に参加していた学生たちの気づきを用いた。茶屋道・筒井(2010)は、災害ボランティアに参加した学生の気づきから「自らの意志で参加を表明し、被災地の方々に学び、試行錯誤しながら蓄積してきた学生ボランティアという立場での経験は、それぞれが専門職として災害支援を行うようになってからではできない経験であり、その経験によりそのボランタリズム精神が涵養された」と結論づけた。そのことからも、学生ボランティアという立場で「ボランティアが担うことが望ましい領域の設定を問い、ボランティア自身がその問いに悩みつつ活動する様」を本事例からあぶり出し、災害ボランティアの枠組みを見直す可能性を探ることとした。また、宮定(2021)は、コロナ禍においても学生の災害ボランティアへのニーズがあることや、危機管理能力が向上することを指摘しており、本稿もその主張に賛同するものであるが、宮定(2021)の報告は、活動団体へのヒアリングに基づくものであり、実際に被災地で活動した人々の生の声を明らかにしたものではない。したがって、コロナ禍における学生らの災害ボランティアの意義を補強することを目的として、学生らの生の声を記載することとした。

2．本稿の背景となる理論的枠組み

本稿において中心概念となる社会的共同性とは、社会全体にわたる公共性の実現を担うもので、ここでいう公共性とは、直接の担い手が誰であるとか、その直接の動機が何であるかではなく、その共同社会全体の共同の利益に資するか否かによって判断されるものである(岡本、1997)。

以下、岡本(1997)より社会的共同性に関する論考をさらに引用する。伝統的共同体の崩壊に伴って、相対的に自律的な市場と政府が社会的共同関係の主要な実現の形態となってきた。例えば、政府は租税やその執行を支える強制力を背景にして財・サービスを提供し、市場における営利追及活動も、社会全体に対して広範な便益を提供し、それが公共性を担っているかどうかはその社会において公共的であるとみなされるかどうかによって決まる。そうした市場と政府は、社会的共同を直接に意識させずに遂行させる非人格的メカニズムである。これにより膨大な近代社会のメカニズムが可能になった反面、社会的共同を私たち市民に見えにくくするという特徴をもっている。見えにくくなった社会的共同性を自覚する(自覚化)には二人の局面があり、一つ目は互いに役にたってこの世の中が成り立ってい

るということの自覚化と、二つ目は、「共生」という言葉で表現しうる非常に深いレベルの共同性の自覚化である。後者の自覚化は、「自立」を要求される政府・市場という競争社会で生きる人間が、自立を越えたところで、つまり、自我－他者という関係を溶解させる水準で「癒される」という体験をもち、援助する側が援助されることもありうるものである。このような水準の共同性は、普通の人々に普通に生きる意味を与えている領域であり、日常の競争生活の中では「賢い」生き方の背後に隠されているという意味で、「隠された共同性[1)]」（以下、隠された社会的共同性）と言い換えられる。本稿は、大学生のコロナ禍における災害ボランティアが、この二つの社会的共同性の自覚化を育む可能性に言及する仮説的な論考となる。

3．研究の目的

コロナ禍の災害ボランティアが、地域福祉への広がりや社会変革の可能性を有する災害ボランティアのあり方を問い直す機会となったのかを、支援活動に参加していた学生たちの気づきを基に、社会的共同性という概念を用いて質的に探究することである。

4．研究方法

1）令和2年度7月豪雨災害をめぐる支援活動

令和2年度7月豪雨災害は、2020年7月3日から7月31日にかけて、日本付近に停滞した前線の影響で、暖かく湿った空気が継続して流れ込み、各地で大雨となり、人的被害や物的被害が発生した一連の大雨による被害をさす[2)]。特に7月4～7日の九州における記録的な大雨は、熊本県球磨川流域の人吉市・芦北町・八代市等に大きな被害をもたらし、熊本県内だけでも死者67名、行方不明2名[3)]と、近年の豪雨災害の中でも深刻なものであった。著者らは、人吉市と比較して県外からの支援が少ない印象を受けた熊本県八代市坂本町を訪問し、災害支援活動を組織的に展開した。こうした一連の活動を研究対象化する目的で、これまでの会議録を参照し、時系列に出来事を整理した。

2）活動への参加動機と支援活動をめぐる参加者の気づき

1）の活動が発足した当時から参加している神戸大学学生4名（活動参加時は2回生3名：A,B,C氏、4回生1名：D氏）を対象に、最初に地域を訪問したとき（A,B,C氏：2020年9月24～26日、D氏：2020年11月20～23日）を対象に当時の活動の写真をみながら、活動をめぐって印象に残っていることについて2時間程度のヒアリングを個別に行い、その言説を全て書き起こした。書き起こしたテクストはSCAT（大谷、2007）を用いて分析を行なった。SCAT分析では、テクストから、1. テクスト中の注目すべき語句を抽出し、2. テクスト中の語句の言い換え、3. 2を説明するようなテクスト外の概念、4. テーマ・構成概念を導き出す。本稿では、紙幅の関係から1と4を中心に論を進め、テクスト中の注目すべき語句を斜体で、テーマ・構成概念を＜＞で表記した。

5．結果と考察

1）令和2年7月豪雨災害をめぐる支援活動

2020年7月3日の災害発生以降、多い時で週に2～3回のオンラインミーティングを続けて、全部で5回の訪問を行った（表1）。また、そのミーティングには多様な災害関連団体[4)]が参加し、災害情報及び災害支援行動のプラットフォームとなることをめざした（以下、災害情報共有グループ）。現地訪問のあとは必ず災害情報共有グループを対象に報告会を開催し、現地の状況やその後の活動予定について情報共有を行なった。第2回現地訪問前に、災害情報共有グループをベースとした令和2年7月豪雨災害の熊本県八代市坂本町での支援活動を「くまとーち」プロジェクトと名付けた。

現地訪問1回目は3名（教員、ポスドク、マスター）、2回目は6名（最初の3名と新規学生3名）、3回目は4名（2回目に参加した3名と新規1名）、4回目は6名（教員、マスター、2,3回目に参加した2名、新規2名）であった。現地訪問にあたってのコロナ感染予防として、現地活動前後2週間の体調管理チェックシートへの記入、Covid-19抗体検査、現地でのマスク着用、パーテーションを用い

表1. 熊本県八代市坂本町をめぐる支援活動の展開と関連会議

	日付	活動内容
2020	7/3	令和2年7月豪雨災害が発生
	7/6	第1回熊本南部豪雨災害に関する会議
	7/9	第2回熊本南部豪雨災害に関する会議
	7/17	第3回九州南部豪雨災害に関する会議
	7/26~29	第1回現地訪問
	7/31	第1回現地訪問報告会
	8/12	次回訪問に向けた打ち合わせ
	8/17	現地訪問報告・交流会
	9/24~26	第2回現地訪問
	9/29	くまとーち第1回活動報告会
	10/4	今後の計画に関する会議
	10/9	今後の計画に関する会議
	10/16	今後の計画に関する会議
	10/26~10/30	１１円（いい縁）募金の企画実施
	10/30~11/1	第3回現地訪問
	11/4	第3回現地訪問報告会
	11/13	第4回現地訪問に向けた会議
	11/15	第4回現地訪問に向けた会議
	11/20~23	第4回現地訪問
	12/1	第4回現地訪問報告会
	12/9	WILL研究会「立ち止まって考えるくまとーちの未来」
2021	1/9,13	オンライン交流会に向けた会議
	1/27	現地のNPOとのオンライン交流会
	3/1	次の活動に向けた会議
	7/3~5	第5回現地訪問

た空間での食事などに取り組んだ。

現地の受入窓口は、第1回現地訪問の際に出会ったNPO法人球磨川アドベンチャーズやつしろ（以下、地域支援NPO）の方々で、地域での活動は、1）対面の活動：地域の方々が遠方から来ていることを承認したうえで行う、家屋の泥だしやゴミの搬出、2）非対面の活動：河川の清掃活動、地域のお堂やその周辺の歩道の清掃活動等であった。なお、災害ボランティアをコーディネートする八代市復興ボランティアセンターは、2020年7月7日に設置され（活動開始は7月15日）、県外からのボランティアは一切受け入れない方針で、その方針は2022年12月まで続いた。

2）コロナ禍の災害ボランティア活動への参加動機

A氏は1年生の頃から運動部に所属し、自発的に地域活動などに参加した経験はなかった。2 回生になりコロナ禍で部活が中止になるなか、授業を通して知ったESDプラットフォームWILL（以下、WILL）[5]に加入した。WILLのメンバー向けに配信されている情報にふれ、災害支援に向けた動きがあることを知り、第 1回現地訪問報告会に参加し、「*好奇心が疼いた、知らない世界、災害の現場見たことないから見てみたい。助けに行かなきゃ、というような気持ちの方が大切なのかな*」という思いから、第2回現地訪問（9月）に参加した。

B氏は高校生の頃に2014年8月豪雨で被災した地域で災害ボランティアをした経験をもっている。神戸大学入学後、正規科目である「ESDボランティア論」の履修を通してESDスタディツアープログラムのESD実践現場のボランティアを経験し、1回生の夏休みにWILLに加入した。2019年にESD大船渡支援プロジェクトとして災害ボランティアへの参加を考えるも、他の活動と時期が重なったため参加を見送った。A氏も、第1回現地訪問報告会に参加し＜現場を見てみたいという思い＞から、第2回現地訪問（9月）に参加した。A氏は高校時代の災害ボランティアの経験をふりかえり、「*あの時の地域（岡山）って、ボランティアがあふれすぎてさばききれないという状況だった。今回（熊本）はたりてないって感じで。どういう差が出てるのかもみてみたかったし*」というように、＜災害ボランティアの比較をしたい＞と考えていたことがわかる。また、＜コロナ禍のボランティア方法論への関心＞も動機として挙げていた。

C氏は、1年生から兵庫県学生献血推進協議会に入り、B氏と同様に、「ESDボランティア論」の履修を通してESDスタディツアープログラムのESD実践現場のボランティアを経験していた。ESDの授業を担当するTAや教員らに誘われるままにWILL主催の合宿（2020年3月）に参加し、WILLに加入した。運動部に所属するも、コロナ禍で活動が中止になる中、WILLのメンバーからの誘いを受け、2020年6月に実施した第1回WILLオンラインカンファレンスでは副代表を務めた。2020年7月ごろは運動部への所属意識が高く、災害ボランティアへの興味関心はA,B氏と比較して高くないものの、第1回現地訪問に参加した学生の誘いを受けて、第2回現地訪問（9月）への参加を決めた。C氏は、「*あの時コロナでくすぶってた、あんまり活動ができてなかったので、何かやりたいな、って気持ちはあった。*」という言説から、A,B氏のような災害現場を見ることは異なり、＜メンバーからの誘い＞や＜コロナ禍で動けないことに対するくすぶりの解消＞が動機となっていた。

D氏は、1年生から神戸大学ボランティアバス（ボラバス）の一員として東日本大震災の復興支援に関わっていた。また2016年に発生した熊本地震の復興支援を目的としたボランティア団体Kontiに2019年から所属し、2019年10月の台風19 号で被災した宮城県丸森町への災害ボランティアにも参加していた。Kontiで予定していたボランティア活動の見通しがコロナ禍で立たない中、災害情報共有グループへの参加を通して、豪雨で被災した熊本を神戸大学のメンバーが訪問したことを知った。＜災害が発生するたびに感じる「何かしたい」という気持ち＞と、＜コロナ禍の現地訪問の方法への関心＞を動機として第4回現地訪問（11月）の活動に参加した。

森谷ら（2021）は、台風で被災した地域への学生災害ボランティアの参加動機が、(1) 利他の心や活動への潜在的な興味、活動を通した自己成長への期待、(2) 自身の災害経験からくる恩送り、(3) 他者からの刺激、学習経験、時間的・精神的余裕、災害状況の認識、(4) 大学からの働きかけ、(5) 充実感、想像と現実のギャップを、であることを明らかにした。＜災害が発生するたびに感じる「何かしたい」という気持ち（D氏）＞は(1)に該当し、＜現場を見てみたい（A,B氏）＞という気持ちは、(3)に該当する。さらに、所属している運動部の活動がコロナで中断していたこと（A,C氏）は、(3)の時間的余裕に該当すると考えられるが、コロナ禍は通常の活動の多くが中断する特殊な状況であり、その状況における時間的余裕は、森谷ら（2021）の示すものとは質が異なると考えられる。一方で＜コロナ禍のボランティア方法論への関心（B氏＞、＜コロナ禍の現地訪問の方法への関心（D氏）＞、＜コロナ禍で動けないことに対するくすぶりの解消（C氏）＞は、森谷ら（2021）では挙げられていないものである。コロナ禍で対面での活動や外出を社会的に

抑制されていた特殊な状況であったからこその動機である。宮定（2021）は、感染症対策を求められる時期でも学生災害ボランティアのニーズがあることを指摘していたが、本稿の結果は、その「ニーズ」の具体を表すものと考えうる。

3）活動を通した気づき

3-1）現地訪問に対する地域の方の反応

現地での地域からの反応に関しては、全員、好反応だという印象をもっていた。A氏は、「*行ってみたら向こうに困ってることがあってきてくれてよかった、というのが絶対ある。*」、B氏は「*僕らは最初、コロナの中で来るなよと言われると思ってた。こんな中でもわざわざ来てくれたんだね、と言われた*」、C氏も「*自分はなんかそれ当たり前と思ってやってたけど（地域の方に認められて）あの時はなんか嬉しかった。*」、「D氏も、「*またきてくれたってことに嬉しい、って感じで大歓迎された*」と述べており、＜コロナ禍の被災地訪問が地域に受容された＞という認識は全員共通していた。

渥美（2021）は、コロナ禍で発生した令和2年豪雨災害の災害ボランティアをめぐり、「SNSなどを通じて、現地に行った人々が行かなかった人々から批判され、反対に現地に行かなかった人々が現地に行った人々から非難されるという事態」が起こっており、「社会的に受容されるかどうかという点で迷いが生じたために現地にいくことを断念した」と述べていた。ここでいう社会的な受容は、災害ボランティア同士の社会に関する記述に留まっているが、本事例は、被災した人々や地域支援NPOからの反応という範囲での社会的な受容は概ね良好であったことを示している。ただし、「フォーマルには県外からの災害ボランティアを受け入れない」という暗黙のルールに従い、地域支援NPOは、私たちのことを「災害ボランティア」ではなく「研修としてきた」と結論づけ、SNSでもそのような発信を行っており、不当な権力作用が地域支援NPOに影響していたことが読みとれる。

3-2）対面の活動を通して得たこと

対面の活動として、現地のコーディネーターのもと、家屋の廃品物の運び出し作業や被災した地域の方々との対話を行なった。

家屋の廃品物の運び出し作業では、屋内で作業している災害VCをフォーマルに派遣されてきた地域の災害ボランティアの方々がと出会った。A氏は「*その人たちがボランティアでできることをしてるのか専門的なことをしてるのかどちらか*」を疑問に感じ「*専門的な人がいるなら、神戸から熊本に行って僕たちにできることとできないことがある、と感じた。スキル要るんやなって感じた。*」と述べていた。これは、「神戸から専門的なスキルをもっていったわけではない」という意味であろう。またC氏も「*せっかく兵庫から来たけど、自分ができることって意外に難しい、簡単にはいかないなって*」と、同様な感想を述べている。これらは＜災害ボランティアの素人であることに対する葛藤＞であり、コロナ禍にも関わらず遠方から駆けつけたという状況や、フォーマルな災害ボランティアとの出会いがこの葛藤を明瞭にしたと考えられる。

次に、地域の方々との対話を通して、A氏は、「*被災した人を目の前に何を話せばいいだろう、悩んだ。自分へのもどかしさが勝ってる。人と会話を繋げる力を失っていた。*」と語っている。A氏の発言から＜被災地の方々と話すということに対する想像力の欠如＞がみてとれた。C氏も、「*自分が何のために住民の方と話すのか、実際に行ってみて何を聞きたかったのか、わからなくなった*」と述べていた。B氏は地域の方々との対話には苦労した感覚はないが、「*何十年も住んでで、だからやっぱりそこに住み続けるんだと、すごいはっきりしていた。ぜったいこれ、残り何十年で絶対不便だろうし、ここに住んでいる方が。色々思うことはあるんで すけど、でもやっぱここに住み続けたいとおしゃって、だからそのために片付けとかもちゃんとやってて。そうなんやなって、見ているうちに、昔はこの石ここになかったとか、昔話がいっぱい出てきて。あ、なんかこういうところなんかなって思い入れというかを同時に感じた記憶がある。*」と語っていた。地域の方々に話を聞く前に、崩落した山の斜面や、流木が詰まった側溝などを見学し、今回の災害が怒ったメカニズムについてNPOの方が解説をしてくださった。しかしながら、B氏は、その災害のメカニズムよりも、＜被災してもここに住み続けるという住民の意思＞にふれたことを印象深く語っていた。D氏は、「*人との繋がりができてるのっていいな、って印象的で。*」と述べており、自身がすでに経験したような＜災害ボランティアを通した地域とのつながり＞をコロナ禍でも感じられたことが印象に残っていると語っている。D氏はこれが最初の熊本の豪雨災害の現場訪問であるが、D氏の「*またきてくれたってことに嬉しい、って感じで大歓迎された*」という言説は＜他の学生らがつないできた地域の方々との関係への共感＞と考えられた。また、「*オンラインではなく、対面で一緒に話をしながらっていうところが、人と人との関係がより深まっている大きな意味があるな*」とも語っていて、＜オンラインではできない人と人との繋がり＞に改めて気づいていた。

以上より、対面で行った活動の気づきは、従来の「災害ボランティア」の枠組みの中で捉えうるもの

と、そうでないものに分けることができる。＜被災してもここに住み続けるという住民の意思＞＜災害ボランティアを通した地域とのつながり＞＜被災地の方々と話すということに対する想像力の欠如＞の3つについては、「災害ボランティア」で得られる気づきであり、＜被災地の方々と話すということに対する想像力の欠如＞は、森谷ら（2021）の想像と現実のギャップと同様の現象である。＜他の学生らがつないできた地域の方々との関係への共感＞については、学生等団体が継続して関わっている場合に得られる気づきであると考えられる。一方、＜オンラインではできない人と人との繋がり＞や＜災害ボランティアの素人であることに対する葛藤＞は、コロナ禍の災害ボランティアであることが影響していると考えられた。特に、災害ボランティアの素人であることに対する葛藤＞がコロナ禍の影響を受けている理由として、コロナ禍を理由に現地訪問を迷う災害ボランティアが多くいるなかで、それでも現地にきたからには「それなりの何か」があるはずだ、と地域の支援活動を行う人々と話す中で感じたことが影響していると考えられる。

3-3）非対面の活動を通して得たこと

非対面の活動として、球磨川の支流である百済来川での災害ゴミの清掃活動と支援物資拠点の付近にあるお堂周辺および民家からお堂までの道の草刈り（第2回現地訪問）、球磨川本流での災害ゴミの清掃活動と球磨川沿いの看板周辺の草刈り（第3回現地訪問）、球磨川本流での災害ゴミの清掃活動（第4回現地訪問）をおこなった。

まず、川の清掃活動に関する気づきをまとめる。A氏は、「*災害復興のボランティアなのか？これは、と思った。抵抗感はなかったが、今そっちなんだ、という気持ちになった。でも地域の人が求めているなら、とは思った。*」と述べていた。C氏も「*最初に川に入った時は災害復旧の活動とは思わなかった*」と述べていた。こうした気づきを＜災害ボランティア活動に対する違和感＞とした。一方、B氏は、「*川で拾ったものが、一番生活感がある。（対面で行った家屋の廃品物の運び出しと比較して）材壁の破片とか、木材とか、家だな、って思うんだけど（生活感を）意識しない。陶器とか服とか、すごい生活感あるなあって思って触った。*」と述べている。＜災害ボランティアの活動に対する違和感＞を想起しつつ＜川での清掃活動を被災地の人々の生活感を感じる活動として位置づけ＞ていたことがわかる。C氏は、「*目に災害ゴミが目に入ってくる、これ自体が災害の後感を自覚させられる。見えるところを綺麗にすることが大事*」と述べており、＜川周辺の清掃活動を生活再建とつながる活動として位置づけ＞ていたことがわかる。被災者の方々が毎日住む空間の景色がずっと災害の時のままであるのをみるのが辛い、と話していたことを共有していたこともこの気づきに影響していたと考えられる。D氏は、「*川とか自然に対するボランティアっていうのが自分にとっては初めてだったので。最初に流れてきたものが海に流れていかないように説明を聞いた時に、確かにそういう支援もあるなと思った。川が綺麗になることによって散歩した人たちが気が晴れることがある。その説明を聞いて、自分の中でハッとした。自分にとっては人に対する支援、というのが大きくなっていて、そればっかりになっていたことに気が付かされて、支援の中にも色々な活動があって、それが一つの意味を持っているだけでなくて、色々な面に影響を及ぼすことができるんだってことが、自分の中でその考えが抜けていた*」と述べている。

次に、A,B,C氏は、第3回現地訪問の機会に、地域支援NPOに、球磨川流域の「くまがわ」看板の周囲の草刈り作業を提案し、その作業が毎日球磨川流域を行き来する地域住民の方々の支援につながると位置づけて、共に作業を行った。C氏はその活動や川の清掃をふりかえり「*縁の下の力の持ちじゃないけど、誰かがやらなきゃいけない。*」と述べており、これはコーディネートされた活動ではなく、現場で過ごす中でこれは今被災地に必要なのではないかと考え提案した活動をさせていただく機会だったという。以上より、非対面の活動を通して、＜災害ボランティアの活動に対する違和感（A,C氏）＞、川の清掃活動を＜被災地の人々の生活感を感じる活動として位置づけ（B氏）＞たり、川や道路やお堂といった地域の公共空間の清掃活動を＜生活再建とつながる活動として位置づけ（C氏）＞ていたことがわかった。D氏は、川での清掃活動が災害ボランティアの支援として意義があると認識しつつも「*どれだけ力になれているのかがわからない。人と会っていると会話を通して反応が会ってわかるけど、自然に対してとなると確かに目に見えてゴミの量が減ったとかはわかるものの、これが本当に力になれてるのかってところで少し悩む*」と述べていた。これは、妹尾（2008）が、学生の災害ボランティアが「目前の被援助者に及ぶ援助の効果」をもとに継続していたことを示したように、D氏が「目前の被援助者に及ぶ援助の効果」を感じながら1年から4年まで災害ボランティアを継続していた可能性を示している。したがって、D氏は川の清掃活動を＜目の前の被援助者への効果を感じにくいもの＞として位置づけていたと考えられる。一方、災害ボランティア経験がD氏に比べて乏しいA,B,C氏は、川での清掃活動を＜目の前の被援助者への効果を感じにくいもの＞としては捉えておらず、むしろ被災地の生活感を感じ

たり生活再建につながるものとして捉えていた。

4) コロナ禍におけるインフォーマルな災害ボランティア活動の意義

社会福祉協議会（社協）を中心とした災害 VC の活動支援は、発災直後、避難所生活、仮設住宅生活、復興住宅というフェーズに分かれ、それに応じた支援を展開している[6)]。本間（2014）は、災害の度に行われる瓦礫撤去や泥かきを災害ボランティアの象徴的活動と挙げつつも、生活再建に直接結びつくわけではない場所の瓦礫撤去や泥かきは行政が行う業務の手伝いであり、被災者の生活再建に直接関わる支援とは言い難いと指摘している。そう指摘されながらも、組織的な災害ボランティアのコーディネートの元で、地域福祉的な活動が災害ボランティアの中で展開してきた災害 VC があったのも事実である。しかし、災害ボランティアの象徴的な活動以外に災害ボランティアの派遣ができたのはボランティアが有り余る状況であったからであり、コロナ禍で県内の少数のボランティアのみで災害 VC が運営されている状況では、まず泥かきといった象徴的な活動に集中すると推測される。したがって、本事例の非対面の活動は、フォーマルな災害ボランティア活動では先送りにされるものであると考えられる。従来の「全国から・迅速に・短期集中」で現地に駆けつける災害ボランティアによる支援は、緊急援助から復旧復興支援、そして地域福祉へつながるという時間の経過をたどる。これらは、基本的に被災者のニーズに寄り添った支援である。被災者のニーズを、被災者の実際の声から導き出すならば、例えインフォーマルな災害ボランティアでも、従来の付加・補完の災害ボランティアの枠組みと変わりはない。一方、被災者の声なきニーズを探り出すこともボランティアの本質であり、そういった潜在的なニーズを探ることが、災害ボランティアの枠組みを広げることにもつながるだろう。本稿では、コロナ禍という特性上、被災者と対話することが困難な状況にあり、だからこそ、被災者のいる空間の中で被災者の生活再建につながりそうな支援活動を想像・創造するという機会が生まれたことを報告した。県外からのボランティアが制限されるということは、被災した地域へ地域外の人々が関わりを持つ可能性を閉じることにもつながる。生活再建のための直接的または間接的な支援を空間的な広がりをもたせつつ同時に行うという形で、従来の災害ボランティアの枠組みを広げれば、コロナ禍でも「いてもたってもいられず駆けつけた」人々の思いを止めることなく被災地の復旧から復興までの支援につなげることができたのではないだろうか。

また、学生たちの現場での迷いは、はじめにで述べた「ボランティアが担うことが望ましい領域の設定を問う」ことと関連している。今回、第 3 回現地訪問で提案した球磨川流域の「くまがわ」看板の草刈りは、本来は河川を管理する行政が取り組む作業だと考える。災害により公共空間のサービスが滞っている時にこうした清掃作業に取り組むのは、補完サービスとしての災害ボランティアであるといえよう。しかしながら、ここで重要なのは、その活動をコーディネーターからあてがわれたのではなく、学生らがその活動を地域支援 NPO に提案し、それを実践させてもらえた、ということである。そうした提案のプロセスこそが、ボランティアが担うことが望ましい領域の設定を問うことであり、この活動が共同社会全体の共同の利益に資するか否かを考える機会になる。こうした災害ボランティアの活動そのものについて悩んだり提案できる余地が災害 VC にできると、災害 VC がおもてなしに偏重する傾向（宮前、2021）を防ぐことにもつながるだろう。こうした相互作用が重なっていくことが、市場・政府・ボランティアのバランスの上で成り立つ公共性の実現につながると考えられる。

5）コロナ禍のボランティア活動による社会的共同性の自覚化

社会的共同性の自覚化の概念は、岡本（1997）に依拠している。社会的共同性の自覚化は、互いに役にたってこの世の中が成り立っているということと、自我－他者という関係を溶解させる水準で「癒される」という体験をもち、援助する側が援助されることもありうる深いレベルの共生（隠された社会的共同性）に気がつくことの二つをさす。

一つ目の、互いに役にたってこの世の中が成り立っているという感覚は、災害ボランティアでは実感しやすい。家屋の廃品物の運び出しや、地域で支援活動を続ける団体の支援、それらを通して、感謝の言葉を聞き、手応えを感じている様子は 4 名の言説に共通していた。一方、D 氏は、くまとーちのメンバーが災害ボランティア初心者ばかりで構成されていたことに驚きつつも、「*ボランティアとか復興支援って、垣根が高いと思われがちで、若い人たちっていかない人が多い、少なくとも 1 度経験した場合は、2 度目は違うし、ベテランさんもいずれは動けなくなってしまうかもしれないし、日本で災害はずっと起こるわけだし、支援は必要とされるなか、災害ボランティアにはボランティア育成の可能性がある。*」と述べている。このことから、D 氏は、これからの社会を想定した相互依存性に言及していることがわかる。こうした気づきは A,B,C 氏から聞くことはなかったが、D 氏が災害ボランティア熟達者の人々の中にいては気がつかなかった視点である

と思われる。

一方、非対面の活動の中で、隠された社会的共同性の自覚化につながるものとして捉えうる気づきがあった。C 氏は、人に誘われたことが初発の参加動機になっており、災害の実態や災害ボランティアに関する経験を得ることへの期待は他の 3 名に比べると低かった。コロナ禍という理由で、被災地で「川での清掃活動」や「地域のお堂の草刈り」といった、人と話す必要がない活動に従事することになった C 氏は、そうした活動そのものに癒しを感じていたという言説や、その活動を通して自身が評価されたという経験を「これこそが熊本にきた意味」と語っていた。自身が社交的ではなく、人と話したり誰かと活動をするのが苦手という課題意識を持っていた C 氏にとって、災害支援としても地域支援としても自身の癒しとしても捉えうる活動との出会いは、＜援助しつつ援助されていることの自覚＞といえる。

A,B,D 氏についても、「*本当に力になれてるのかってところで少し悩み*」ながら活動をすることは、通常の生活におけるわかりやすい自己と他者の関係から、空間の中で他者を感じ、自分の存在がその空間に影響していることを信じるといった類のものであると考えうる。岡本（1997）が、隠された社会的共同性の自覚は自然保護に対してもある程度あてはまると指摘していたが、これは、働きかけた対象からのレスポンスのなさや、圧倒的に脆弱性な対象に働きかけることに対する当人の自覚があるかどうかということだと推測できる。中村（2021）は、手をとりあって触れ合うことから得られる関係性を取り結ぶことが本質的な人間のあり方であり、交換価値原理に基づく人間関係が災害によって一時的になくなった時に、類的存在としての人間の本質に触れる災害ボランティアが発露すると述べている。そうした類的存在としての人間の本質に触れるような関わりを大事にすることが、ひいては地域住民とボランティアのエンパワメントを促し、社会変革につながるものへと拡張しうる。しかし、手を取り合って触れることが困難なコロナ禍では、本稿で述べたような＜公共空間にゴミがあり続けることで被災という精神的なダメージを受け続けている住民に寄り添う＞といった、被災者の生活圏や生命圏を創造する力が必要であり、それが現代の隠された社会的共同性の自覚化の方法論といえるのではないだろうか。

6. まとめ

令和 2 年豪雨災害の発生からその 1 年後まで、直接的に知覚可能な範囲で Covid-19 の感染者を出すこともなく、合計 5 回の訪問ができた。発災当初は訪問回数も計画できておらず、現地のニーズに沿って進める形になったが、コロナ禍であっても災害後の復旧には人手を必要とし、フォーマルな災害 VC 以外のインフォーマルな支援も、地域の方々に必要とされていたことが明らかであった。また活動を通して学生らがそのニーズにふれ、コロナを超えてまで来たことに対する評価を受け、コロナ禍でも活動する意義を実感していた。今後、仮にコロナが引き続き蔓延していたり異なる感染症が蔓延している場合でも、災害が起こった場合は、感染予防対策を徹底して現地へ支援に行くことが必要であると考える。

また、「豪雨災害の状況を自分の目で見てみたい」という動機から災害ボランティアに行く若者の存在は、災害復興から地域支援をサポートする存在として重要な役割を担っている。災害が発生すると、「何かできることはないか」という感覚になる人々が増えてきた社会において、組織化した災害ボランティアの仕組みは（大門他、2020）ボランティア文化の維持に貢献してきた。しかしながら、自発性を受け止められない災害 VC では、今後の複雑な事象が絡む社会におけるボランティアの可能性を矮小化してしまうだけでなく、地域福祉への支援の可能性をも閉ざしてしまう。

コロナが蔓延する前の社会では、災害ボランティアを通して、相互依存的な社会的共同性が、隠された社会的共同性と比べて自覚化しやすいものであったように思う。コロナ禍で余儀なくされた「人と対面しない」ボランティア活動は、隠された社会的共同性を自覚化させる手法として有用である可能性が本稿で示された。ただし、組織化されたボランティアの「不当な権力作用」に抵抗して素人ながらも遠方よりボランティア活動に行ったエネルギーは、コロナ禍だったこそ生まれたものと自覚している。「*コロナ禍でやってるからこそ、普遍的なもの。ためされてる感じある。今のところ（コロナに）勝ってる気でいます、感染症の流行くらいじゃ人間はもろともせず人はつながっていけるぞ*」。という B 氏の言説からも、コロナ禍といった混乱した社会におけるボランタリズムの発露やそのボランティアの境界の設定をめぐる葛藤が、従来の災害ボランティアを超えて社会変革につながる一歩と考えることができるという主張で、本稿を締めくくりたい。

注釈

1) 岡本（1997）では、「隠された共同性」と記載されているが、文脈から社会的共同性を「共同性」と略したものと考えられるた め、本文では、社会的共同性の二つ目の自覚化については「隠された社会的共同性」として論じる。

2) 気 象 庁 HP（ https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosa- i/report/2020/20200811/jyun_

sokuji20200703-0731.pdf)

3) 令和2年7月豪雨に関する被害状況について（熊本県危機管理防災課、令和3年12月3日 ）https://www.pref.kumamoto.jp/-uploaded/life/74612_211829_misc.pdf

4) 神戸大学HCセンター、神戸大学ボランティア支援室、神戸大学震災救援隊、Konti、ESD推進ネット兵庫神戸、ESDプラットフォームWILL などの団体で構成されていた。

5) 神戸大学HCセンターを事務局とした大学生等の壮年初期の世代が主体となったESDのプラットフォームで2019年に設立された。

6)「社協における災害ボランティアセンター活動支援の基本的な考え方―全国的な社協職員の応援派遣の進め方―」全国社会福祉協議会、地域福祉推進委員会を参照した。

7. 謝辞

本研究を実施するにあたり、地域で著者らを含む学生らの支援活動を受け入れてくださった熊本県八代市坂本町で出会った地域の方々、NPO法人球磨川アドベンチャーズやつしろのみなさまに心より感謝を申し上げるとともに、1日でも早く穏やかな生活が送れるようになることを祈っている。

8. 引用文献

阿部利江（2021）災害ボランティアを通して福祉や防災を学ぶ．東北福祉大学研究紀要 45：179-201.

茶屋道拓哉・筒井睦 (2010) 東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義 (特集 東日本大震災 : 被災地における支援活動の体験). 九州看護福祉大学紀要 12(1): 25-37.

大門大朗・渥美公秀・稲場圭信・王文潔（2020）災害ボランティアの組織化のための戦略． 実験社会心理学研究 60（1）：18-36.

本間照 (2014) 災害ボランティア活動の展開と新たな課題 : －支援力と受援力の不調和が生み出す戸惑い－ . 社会学年報 43(0): 49-64.

宮定章 (2021) 新型コロナウイルスの感染が懸念される状況における学生災害ボランティア活動 : 和歌山大学災害ボランティアステーションの実装に向けての一考察 . 和歌山大学 Kii- Plus ジャーナル (1): 67-73.

森谷健太・中沢峻・佐々木秀之（2021）「大学生の災害ボランティアへの参加動機の質的分析と参加推進の方策に関する一考察」. 日本教育工学会論文誌 44(Suppl.): 13-16.

中村勇太朗 (2021) ボランティアの定義に関する労働論的アプローチ . 観光学 (24): 41-47.

大谷尚（2007）4 ステップコーディングによる質的データ分析手 法 SCAT の提案 -- 着手しやすく小規模データにも適用可能な 理論化の手続き. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 . 教育科学 54(2), 27-44.

岡本仁宏 (1997) 市民社会、ボランティア、政府.『ボランティアと市民社会－公共性は市民が紡ぎ出す－』晃洋書房．pp.91-118.

妹尾香 (2008) 若者におけるボランティア活動とその経験効果 . 花園大学社会福祉学部研究紀要 (16): 35-42.

鈴木勇・菅磨志保・渥美公秀（2003）日本における災害ボランティアの動向 : 阪神・淡路大震災を契機として . 実験社会心理学研究 42(2): 166-186.

頼政良太 (2020) 熊本地震におけるボランティア活動とその後の被災地への影響 －西原村災害ボランティアセンターから西原村 reborn ネットワークへ－ . 復興 9(1); 21–26.

立木茂雄 (1997)「ボランティアと社会的ネットワーク」.『ボランティアと市民社会－公共性は市民が紡ぎ出す－』晃洋書房． pp.119-148.